

語の多義的意味拡張とイメージ・スキーマについて

— belong の場合を基に —

松 中 完 二

1. イメージ・スキーマ

まずはじめに、イメージ・スキーマという現象について、認知言語学における代表的な定義を紹介する。

イメージ・スキーマについて、Lakoff (1987) は次のように説明する。

“イメージ・スキーマの「基本理論」は、ゲシュタルトとしての、すなわち単なる部分の寄せ集めということを超えた、構造化された全体としての形態に起因している。イメージ・スキーマの理解のしかたは根本的に認知的な性格である。これは、形式論理学で育てられた人々がなじる論理構造の理解のしかたとはかなり異なる。形式論理学では、上のようなゲシュタルト的形態というものは存在しない。スキーマの「基本理論」と私が呼んだものは、形式論理学では意味の公理によって表示されることになるだろう。この表示は次のようにして行われるのであろう。CONTAINER〈容器である〉及びIN〈の中にある〉が解釈を与えられていない述語記号とし、A、B、及びXを項の位置に置かれる変項とする。CONTAINERとINという述語の論理は意味の公理により次のように特徴づけられるであろう：

全てのAとXに関して、IN (X, A)〈XはAの中にある〉あるいはnot IN (X, A)〈XはAの中にある〉のどちらかである。

全てのAとBとXに関してCONTAINER (A)〈Aは容器である〉かつCONTAINER (B)〈Bは容器である〉かつIN (A, B) かつ〈AはBの中にある〉かつIN (X, A)〈XはAの中にある〉ならば、IN (X, B)〈XはBの中にある〉である。

このような意味の公理は無意味な記号の連鎖であるが、その中で意味の公理が満たされ得るような集合論的なモデルによって「意味を与えられる」ということになるだろう。”

(Lakoff, G./池上嘉彦他訳『認知意味論』pp.329-330.)

また、Johnson (1987) は、イメージ・スキーマについて次のように結論付ける。

- ・ イメージ・スキーマはわれわれの経験に概念形成以前に構造を与える。
- ・ それに対応するイメージ・スキーマ的概念が存在する。

- ・イメージ・スキーマを、その基本理論を保ちつつ抽象的な領域に写像するメタファーが存在する。
- ・そのメタファーは恣意的なものではなく、それ自体、日常の身体的経験に本来備わっている構造に動機づけられたものである。（Lakoff, G./池上嘉彦他訳『認知意味論』p.333.）

このイメージ・スキーマという考えを、山梨正明（1995：95-97）は次のように説明付けている。

“イメージは、具体的な経験に基づいて形成される心的表象の一種である。われわれは、具体的な経験によって形成されたイメージを介して対象を把握しているだけでなく、状況によっては具体的なイメージを拡張し、この拡張されたイメージを介してより抽象的な対象を理解している。外部世界の把握を可能とする人間の認知能力の一部は、この種の表象能力によって支えられている。人間の創造的な理解には、すくなくとも次のような認知プロセスがかかわっている：(i) ある対象に関し具体的なイメージをつくり上げていくプロセス、(ii) ある対象のイメージを他の対象に拡張していくプロセス、(iii) ある対象のイメージを多角的な視点から組みかえていくプロセス。われわれは、ある対象が抽象的で実体が直接的に把握できない場合には、その対象に関し何らかの具体的なイメージをつくりあげ、このイメージを介してその対象の理解を試みる。また、このようにしてつくりあげたイメージを拡張して他の対象にあてはめたり、当初のイメージを新しい視点から柔軟に組みかえていく。この種の能力は、外部世界の創造的な理解を可能とする人間の認知能力の根幹にかかわっている。また、この能力の一部は、言葉の形式と意味の世界にさまざまなかたちで反映している。

しかし、人間の認知能力は、具体的なイメージだけに支えられているわけではない。われわれは、外部世界の対象にたいし具体的なイメージをつくり上げていくだけでなく、このイメージにかかわる具体的な知識を背景にして、さまざまなイメージスキーマ（i.e.イメージの図式）をつくり上げている。ここでは、イメージは、外部世界の対象の具体的な表象レベルに位置づけられる概念とみなす。これにたいし、イメージスキーマは、具体的な表象レベルの知識としての上位概念として理解する。（ここでは、「スキーマ」ないしは「図式」という用語は、この一般的な認知枠の意味で用いる。）イメージスキーマは、外部世界の個々の対象にかかわる具体的な表象そのものではない。したがって、それ自体は具体的に把握できる存在ではない。しかし、この種のスキーマは、日常言語の形式と意味の拡張、生成を可能とする人間の認知能力の背景として重要な機能をになっている。言葉の形式と意味は、外部世界の知覚、経験を基盤とするさまざまなイメージスキーマによって動機づけられている。

[中 略]

イメージスキーマは、外部世界に関する感覚的経験や具体的な行動を介してつくり上げられる具体的な表象に根差しており、日常言語の概念構造の形成に先行するわれわれの経験を構

造化している。日常言語は、一見したところ、形式と意味の対応からなる記号系として、外部世界と相互作用していく主体の感覚・運動的な経験、空間認知や身体的な経験から独立した自律的な記号系として機能しているように見える。また、言葉の意味は、この記号系形式に対応する存在として、言語主体の具体的な経験からは独立して存在しているように見える。しかし、日常言語の意味は、外部世界に客観的に存在しているのではなく、われわれの具体的な経験的基盤を介して理解され動機づけられている。さらに、言葉の意味の一部は、この経験的な基盤を背景として形成されるさまざまなイメージスキーマによって特徴づけられている。

[中 略]

イメージスキーマは、日常言語の形式・構造から意味にわたる言語表現の拡張のプロセスと言葉の創造的側面を考察していく際に重要な役割をになう。イメージスキーマそれ自体は、言葉の形式と概念構造の形成に先行する認知図式の一種であり、言語現象それ自体のなかにこの種の図式が直接的に認められるわけではない。また、どのようなスキーマが存在するかに関する先験的な基準が存在するわけではない。言語学の分野においてイメージスキーマを問題にする場合には、あくまで日常言語の形式と意味を特徴づける認知のメカニズムとの関連で経験的に提起される。”

こうした考えに基づけば、語や句の多義的意味拡張という現象も、イメージ・スキーマを基に生じる現象であると考えることができる。その具体的事例として、本論文ではbelongを対象に、その多義的意味拡張について考察する。

belongは、「～に属する」という概念を基に、広範な対象を取り、多義を形成する。しかしその多義性は、主体の対象との属し方によって、大きく拡張する。また、belongの有する主体の対象との属し方は、暗黙のうちに、生物に物体が属するものとして捉えられる傾向がある。そのことは、belongに対して当てられる「～に属する」という第一義的な訳語からも容易に推測がつこう。しかしながらbelongは、単に物体の生物への所属という認識のみにとどまらず、様々な広範な対象を取りながら多義を形成しつつも、中心に共通する概念認識を置くことで、これらの多義的意味拡張がネットワーク構造を持って拡張する。しかしながら、これまで言語学の世界では、belongがどのような対象を取り、それぞれの対象に応じた多義のネットワーク関係の原理についての解明を試みた研究は見られなかった。こうした多義のネットワーク関係の根底にある認識法を支える認知原理こそが、イメージ・スキーマそのものであると考えられる。

2. 英々、英和辞書における意味記述

私の知る限り、belongの意味認識と多義構造についての言語学的視点からの先行研究は見られない。従ってここでは既存の英々、英和辞典によるbelongの意味記述を足がかりにする。

The New Oxford Dictionary of English (以下、略してNODEで表す)

belong

▶verb [no obj.]

- 1 [with adverbial of place] (of a thing) be rightly placed in a specified position: *learning to place the blame where it belongs* | *such statements do not belong in a modern student textbook.*
 ■be rightly classified in or assigned to a specified category: *bony fish: the vast majority of living fish belong here* | *the Howard letter does belong to the year 1469.*
- 2 [usu. with adverbial of place] (of a person) fit in a specified place or environment: *she is a stranger, and doesn't belong here* | *you and me, we belong together* | [as noun **belonging**] *we feel a real sense of belonging.*
 ■have the right personal or social qualities to be a member of a particular group: *young people are generally very anxious to belong.* ■(**belong to**) be a member or part of (a particular group, organization, or class): *they belong to garden and bridge clubs.*
- 3 (**belong to**) be the property of: *the vehicle did not belong to him.*
 ■be the rightful possession of; be due to: *most of the credit belongs to Paul.* ■(of a contest or period of time) be dominated by: *the race belonged completely to Fogarty.* [後 略]

『ランダムハウス英和大辞典 第2版』(以下、略してRHD2(J)で表す)

be・long

[中 略]

- 1 (1) 〈人・物が〉(…に) 所属する, 属する, 一員である ((to …)): *the car ~ing [or which ~s] to him* 彼が所有する車 (▶形式張った言い方で *that car of his*, *his car* が普通の言い方) / *That lid ~s to this jar.* あの蓋(ふた)はこの瓶(びん)のものだ / *You ~ to me.* 君は僕(わが)のものだ / *He ~s to the Democratic Party.* 彼は民主党の党员である / *This phrase ~ed to the Vice-president.* この言い回しは副大統領が使ったものだ / *Children ~ with their parents.* 子供は両親と一緒にいるものだ (▶所属関係, 全体と部分との関係を強調する場合には with を用いる).
- (2) (分類上) (…に) 属する ((among, to, in, under, with …)): *~ here* ここに属する / *Poetry ~s with music and dance.* 詩は音楽や舞踊と同じ種類のものだ / *Bacteria ~ to the vegetable kingdom.* 細菌は植物界に属する.
- 2 (1) (クラブ・団体・社交界などの) 一員としてふさわしい, 資格がある ((in …)).
- (2) 〈物・人が〉あるべき [ふさわしい] 場所にある, 所を得ている ((in, on, under, among …)) (周囲と) なじんでいる: *nice little fairy tales that ~ in books.* 本の中にだけあるかわいい空想物語 / *He doesn't ~.* 彼は人となじんでいない / *He ~s in banking.* 彼はきつすいの銀行マンだ (▶to は単に所属関係をいうが, in は所属関係に加えてその場所がその人にふさわしいという意を含む) / *Artists don't ~ in uniform.* 芸術家に軍服は似合わない / *Books ~ in every home.* 本はどの家庭にあってもよいものだ / *This ~s under [on] the shelf.* これの置き場所は棚の下 [上] です / *He is a statesman who ~s among the great.* 彼は偉人の一人に数えられている政治家だ.
- 3 ((俗)) (…の) 所有者である ((to …)).
- 4 ((米南部)) …する必要がある, …しなければならない ((to do)): *You ~ to come.* 来なきや駄目. *belong together* 〈物が〉セットになっている; 〈人が〉恋人同士である.

これらの意味記述に基づけば、belongが「～に属する」という認識を基に、その使用対

象によって多義的意味拡張を強いられる性質を持つものは *NODE* の 2 の語義と、*RHD2(J)* の 1 (1) 及び 2 (1)、(2) の語義における意味である。しかしそこでの記述には、多義的意味認識を生み出す中心的な意味の記述は見られない。ましてや *NODE* では、*belong* に三つの語義を設け、そこから下部認識としての多義的意味拡張が形成されるのは見て取れるとしても、*NODE* が前面に打ち出している *core sense* という、*belong* の三つの語義を生み出す根幹の中心的な認識の記述は見られないままに終わっている。

これらの結果からも、既存の辞書記述では、そうした使用の対象や、その使用対象にあつて更に具体的な意味概念と、それを基に形成される多義構造についての説明は決して充分であるとは言いがたい。そのため、実際の使用例を基に考察をすすめる。

3. *belong* の使用例

3・1 場所に対する使用

3・1・1 居住

- (1) “Don’t send me away! This is where I *belong*. It’s my home, my family.”

「どうかここに置いて下さい！私にはここしかないのです。ここが私の家であり、また家族なんです。」

****映画『サウンド・オブ・ミュージック』

- (2) “This little fellow *belongs* to the Hendersons. So glad you’ll be nursing.”

「このおちびちゃんは何ダーソン家にももらわれることになってるんです。あなた方にこの子を育ててもらえるなんて本当に嬉しいわ。」

****映画『フリントストーン モダン石器時代』

- (3) “Just bring him back and bring him back now. This is where he *belongs*.”

「彼を施設に帰すんだ、今すぐに。彼の家はここなんだ。」

****映画『レインマン』

- (4) “We know we *belong* to the land.”

「我々はこの国に住んでいるんだ。」

****映画『デーヴ』

- (5) “It’s not money I’m worried about, sir. It’s Sabrina. I just don’t want her to get hurt.”

“I’ll be as gentle as I can.”

“Oh, I hope so, sir. She doesn’t *belong* in a mansion, but then again she doesn’t *belong* above a garage, either.”

「私が心配しているのはお金のことじゃなくて、サブリナのことなんです。あの娘が傷つ

くを見るのは忍びないもの。」

「彼女にはできるだけ優しく接するよ。」

「はい、私からもそうお願いします。不幸にもサブリーナは行き場のない娘なんです。お屋敷には住めませんが、かといって車庫の上に住まわせる訳にもいきませんもの。」

****映画『サブリーナ』

- (6) “He doesn’t belong here. He *belongs* in Never-Never-Land with his personal trainer and his assistants and his maid and his God knows who all.”

「彼はここには場違いな人間なんだ。彼は身の回りの世話をしてくれる専用のトレーナーとアシスタントとメイドなんかのいるおとぎの国の住人なんだ。」

****映画『ハード・ウェイ』

- (7) “I don’t *belong* here. I wanna go home! I want my mother.”

「ここにはもういられない。家に帰りたい。母さんに会いたいよ。」

****映画『ショーシャンクの空に』

3・1・2 所属

- (8) “We need Tony. He’s gotta rep that’s bigger than the whole West Side.”

“He don’t *belong* no more.”

「俺達にはトニーが必要だ。彼の名声にはウエスト・サイド全部がかかっていってもかないっこないからな。」

「あいつはもう俺達のメンバーじゃないぜ。」

****映画『ウエスト・サイド物語』

- (9) “I’m staying here.”

“What are you talking about, Doc?”

“There’s no point in denying it. I’m in love with Clara.”

“Oh, man! Doc, we don’t *belong* here! Neither one of us.”

「ワシはここに残るよ。」

「何を言い出すんだ？」

「もう嘘もつけない。クララのことが好きなんだ。」

「またあ、僕達はここの人間じゃないんだ。僕達二人ともね。」

****映画『バック・トゥ・ザ・フューチャー3』

- (10) “You *belong* to here, Ben Stone.”

「君はこの土地の人間だよ、ベン・ストーン君。」

****映画『ドク・ハリウッド』

- (11) “Both those garbage men *belong* to you? Well get'em outta here and don't bring'em back. This is a class joint.”

「そこのクズ野郎はあんたのところの者か？つまみ出せ、そして二度と連れてくるんじゃないぞ。ここは上流階級の人間が集まる所だ。」

****映画『ステイング』

- (12) “It *belonged* to a peasant, your Highness.”

「その者は農民の生まれです、王様。」

****映画『エバー・アフター』

3・1・3 馴染みの場所への帰属

- (13) “Hey, Mrs. Barrett?”

“I'm in the kitchen where I *belong*.”

「ねえ、バレットさん、どこにいるんだい？」

「私はいつものように台所にいるわよ。」

****映画『ある愛の詩』

- (14) “So you might as well pack up your bags and head your ass on back up North where you *belong*.”

「お前らも荷物をまとめてとっとと田舎に帰る用意でもしておいたほうがいいぞ。」

****映画『ミシシッピー・バーニング』

- (15) “Do we have tell you ten thousand times? Now get outta here and go on back where you *belong*! Go on home where you *belong*, boy! You're gonna get hurt now!”

「何度言ったら分かるんだ？さっさと故郷に帰っちまえ！故郷に帰れって言ってるんだよ！さもないと怪我するぞ！」

****映画『ミシシッピー・バーニング』

- (16) “Get back to where you once *belonged*.”

「故郷（元いた場所）へ帰ってこいよ。」

****THE BEATLES, *GET BACK*

3・1・4 そぐう場所への回帰

- (17) “Look, Harvard is like this big Santa Claus bag stuffed full of all kinds of crazy toys. But when the holiday is over, they shake you out and you gotta go back where you *belong*.”

「いいこと、学生時代は面白いおもちゃで一杯のサンタクロースの袋のようなものよ。だけど学生時代が終われば、誰もが無理矢理にでも本来いるべき所へと振り分けられてしまうのよ。」

****映画『ある愛の詩』

- (18) “Love’ll lift us up where we *belong*. Where the eagles cry on a mountain high. Love’ll lift us up where we *belong*. Far from the world we know. Up where clear winds blow.”

「愛が二人の本来いるべき世界へと導いてくれる。イーグルの鳴く山頂へと。愛が二人の本来いるべき世界へと導いてくれる。地上から遠く離れた爽やかに澄んだ風の吹く山頂へと。」

*****JOE COCKER & JENNIFER WARNES, *UP WHERE WE BELONG*

- (19) “Go back to San Francisco where you *belong*, man!”

「おい、お前のいるべきサンフランシスコに帰りなよ。」

*****映画『アイズ・ワイド・シャット』

- (20) “Fairy tales are made-up stories, Stuart. This is real. This is about where you *belong*.”

「おとぎ話なんて、作りごとだよ、ステュアート。これが現実なんだ。自分たちのいるべき場所にいる、ということを教えるためのね。」

*****映画『ステュアート・リトル』

- (21) “And you know, he started eating, like, really weird foods. And he just felt like he didn’t *belong* anywhere, you know.”

「知ってるだろ、彼はね、変な物ばかり食べるようになって、どこにも自分の行き場（生きる世界）がないって感じになったんだよ。」

*****映画『ブラックファースト・クラブ』

- (22) “I’m going to put you where you *belong*.”

「あなた（ここでは本を指す）をちゃんと元の本棚に戻してあげるわね。」

*****映画『ハムナプトラ 失われた砂漠の都』

3・2 状況に対する使用

3・2・1 状況への順応

- (23) “Rainy days and Mondays always get me down. What I’ve got they used to call the blues. Nothing is really wrong. Feeling like I don’t *belong*. Walking around some kind of lonely clown.”

「雨の日と月曜日はいつも落ち込んじゃうの。世に言う“憂鬱”ってヤツね。何が悪いってわけじゃなくて、ただどこにも居場所がないって感じなの。孤独なピエロみたいにその辺をウロウロしてるの。」

*****THE CARPENTERS, *RAINY DAYS AND MONDAYS*

- (24) “I’ve enjoyed every moment we’ve had together and I do thank you for that. Now, if, um, if you’ll forgive me, I’ll go inside, pack my little bags and return to Vienna where I

belong.”

「一緒に過ごさせてもらった時間は、本当に楽しかったですわ。お礼を申し上げます。
では、よろしければ、家の中に入って、私の荷物をまとめて、水の合うウィーンに戻りたい
と思います。」

****映画『サウンド・オブ・ミュージック』

- (25) “Oh, you should see her. You should see Sabrina! The prettiest girl. The prettiest dress. The best dancer. The belle of the ball. And such pose as though she *belonged* up there.”

「ちょっと、あの娘を見てみなよ。サブリーナを見なよ！あの中で一番美しい娘だ。一番奇麗なドレスを着て一番上手にダンスを踊っているあの娘だ。パーティーの華だな。それにあの落ち着いた様子ときたら、上流階級の人たちとも見劣りがしないよ。」

****映画『麗しのサブリーナ』

- (26) “I took an antihistamine before, and it just makes a nice little buzz.”

“Oh, I didn’t know they let bad girls into these things.”

“Do I look like I don’t *belong* here?”

“No.”

「ここへ来る前に、抗ヒスタミン剤を飲んできたの。少し酔いがまわってきたかしら。」

「このような格式高いパーティーにそんな悪い娘が来てるとはね。」

「この席に似つかわしくないかしら？」

「そんなことはない。」

****映画『ワーキング・ガール』

- (27) “I’m not sure what you think you are doing, but you don’t *belong* here.”

「ご自分のなさっていることが分かっておいでかどうかはあやしいところですが、ここはあなたのようなお方にそぐう場所ではございませんことよ。」

****映画『アイズ・ワイド・シャット』

- (28) “You look absolutely beautiful. You truly *belong* here with us among the clouds.”

“Thank you.”

「これは何とお美しいお姫様だ。あなたこそこの場に相応しいお方だ。」

「それはどうも。」

****映画『スターウォーズ 帝国の逆襲』

- (29) “We’re not even invited to this thing, are we?”

“Okay, so we’re not exactly invited. But he’s here, and we’re here, so that makes us in the right place at the right time. Just act like you *belong*.”

「俺達はこの式には招待されていないんだろ？」

「正式にはね。でも彼がこの式に出席して私達も同じ場所にいる。つまりこの式に潜りこむことはチャンスをつかむきっかけでもあるわけよ。式場ではそつなく (うまく) 芝居し
といてちょうだい。」

****映画『ワーキング・ガール』

- (30) “Just act like you *belong*.”

「それらしく振る舞えばいいんだよ。」

****阿倍 一編『英単語ハイパー用例辞典』p.33.

- (31) “Vivian, you *belong* wherever you are.”

「ビビアン、どこにいたって君はすてきだよ。」

*****ibid.*

- (32) “I don’t think I *belong* here.”

「私、場違いみたいね。」

*****ibid.*

- (33) “I don’t think I *belong* here.”

“It’s Okay.”

“I don’t *belong* here.”

「どうも場違いみたいね。」

「そんなことないよ。」

「ここはあたしには場違いだわ。」

****映画『ロッキー』

- (34) “He doesn’t *belong* here. He *belongs* in Never-Never-Land with his personal trainer and his assistants and his maid and his God knows who all.”

「彼らはここには場違いな人間なんだ。彼は身の回りの世話をしてくれる専用のトレーナーとアシスタントとメイドなんかのいるおとぎの国の住人なんだ。」

****映画『ハード・ウェイ』

- (35) “You see, Hanna was the one who wanted me to get the application. And I couldn’t tell her that I just didn’t have the courage enough to go through with it. If you had seen all those dancers, all those people. God, there’s no way I *belong* there.”

「ハンナは私がダンス学校への入校申し込み書を出すことを強く勧めているんです。だから、実際に窓口まで行っておきながら、申し込む勇気がなくて帰ってきたなんて言えっこないわ。だって、あの場にいた他のダンサー達の才能ときたら、もう、私なんて畑違いってところをまざまざと見せつけられたんですもの。」

****映画『フラッシュダンス』

- (36) “Excuse me sir. I think there’s been a mistake. I know it’s detention, but, um, I don’t think I *belong* in here.”

「すみません、先生。これは何かの間違いではないでしょうか？罰なのは分かりますが、私がここに呼び出されることはないと思います。」

****映画『ブレックファースト・クラブ』

- (37) “Leaving, right. Pacman. You don’t fucking *belong* around here, homes.”

「消えな。ここはお前なんかの来る所じゃねえ。」

****映画『カラーズ 天使の消えた街』

3・2・2 職務への従事

- (38) “You see, I think there are certain things you should expect from your President. I ought to care more about you than I do about me. I ought to care more about… I ought to care more about what’s right than I do about what’s popular. I ought to be willing to give up this whole thing for something I believe in. Because if I’m not, …if I’m not then maybe I don’t *belong* here in the first place.”

「皆さんが大統領である私に期待することがいくつかあると思います。私は自分のことよりもむしろ皆さんのことを心にかけるべきなのです。私はもっと…私は人気を取るためではなく、正しいことを心にかけるべきなのです。私は自分の信念のために全てをなげうって進んでいかなければならないのです。なぜなら、もしそうすることができないのならば、…もしそうすることができないのならば…もしそうでないならば、私はこの大統領の地位に就いているべきではないからです。」

****映画『デーヴ』

- (39) “I’m a combat pilot, Will. I *belong* in the air.”

「ウィル、私は戦闘機のパイロットだ。私は空の男なんだ。」

****映画『インデペンデンス・デイ』

3・3 人物に対する使用

3・3・1 所有

- (40) “These weapons *belong* to my father’s father.”

「これは僕のお爺さんが持っていた武器だ。」

****映画『遙かなる大地へ』

- (41) “I’m going to the toilet. You come with me. If the waiter tries to come and help me, you wave him away. It’s all right. I can do it. The leg doesn’t fit properly. I think it *belonged* to someone else.”

「トイレに行ってくるわ。一緒に来てよ。ウェ이터が手伝いに来ようとしたら追い払ってね。大丈夫、一人で歩けるわよ。この足が私の言うことをきかないだけなの。他の人の足なんだわ。」

****映画『ジュリア』

(42) “I think that *belong* to me.”

「そのコートは僕のだよ。」

****映画『ロッキー5』

(43) “But that *belongs* to me.”

“It *belongs* to Coronado.”

「その銃は俺の物だ。」

「コロナドのだ。」

****映画『インディ・ジョーンズ 最後の聖戦』

(44) “That car *belonged* to my brother-in-law.”

「その車は義理の兄貴のなんだ。」

****映画『インディジョーンズ 最後の聖戦』

(45) “This watch *belonged* to her. It’s old-fashioned, I believe…. But she wore it since she was your age. Take it to remember her by.”

「これはお母さんの時計じゃけれどなあ。今じゃこんな物も流行るまいが、お母さんが丁度、あんたぐらいの時から持ったんじゃ。形見に貰うてやっておくれ。」

****映画『東京物語TOKYO STORY』

(46) “You know, I think that R2 unit we bought might have been stolen.”

“What makes you think that?”

“Well, I stumbled across a recording while I was cleaning him. He says he *belongs* to someone called Obi-Wan Kenobi. I thought he might have meant old Ben. Do you know what he’s talking about? Well, I wonder if he’s related to Ben.”

“That wizard just a crazy old man. Tomorrow I want you to take that R2 unit into Anchorhead and have its memory flushed. That’ll be the end of it. It *belongs* to us now.”

「分かってるでしょ、あのR2ロボットは盗品みたいだよ。」

「何でそう思う？」

「だって、洗浄中に記憶データから変な録画が出てきたんだ。そこであれがオビワン・ケノビという人のだって言ってたんだ。多分それはベン老人のことだよ。オビワンって知ってる？ ベンのロボットだとするとやっかいだな。」

「あの魔法使いは間違いじじいだ。明日、R2ロボットをアンカーヘッドに連れて行って、

そんな録画なんか消しちまってくれ。それで終わりだ。R2は今では我々のロボットだ。」

****映画『スターウォーズ』

- (47) “My Dear Mrs. Harris, I thought you might be interested in these diaries *belonging* to Captain Abraham Pringle which I found in the city archives…”

「親愛なるハリス夫人、市の古文書館で見付けたエイブラハム・プリングル船長の日記の中身に興味をお持ちではないかと思ひまして…」

****映画『続・赤毛のアン』

- (48) “Then this droid does *belong* to you.”

“Don’t seem to remember ever owing a droid.”

「では、このロボットはあなたのものですね。」

「ロボットを所有した覚えはないがね。」

****映画『スターウォーズ』

- (49) “This droid *belongs* to her.”

「このロボットはあの女のものだ。」

****映画『スターウォーズ』

- (50) “Bender, that’s school property there, I mean, you know, that doesn’t *belong* to us. That’s something not to be toyed with.”

「ベンダー、それは学校の備品だ。俺達のものじゃないんだ。オモチャにしちゃいけないよ。」

****映画『ブラックファースト・クラブ』

- (51) “Be careful with those plaid ones. They *belong* to the boss.”

「このチェック柄のバッグには注意して下さいね。ご主人様のものですから。」

****映画『ロッキー4』

- (52) “Dr. Jones?”

“Yes.”

“I knew it was you. You have your father’s eyes.”

“And my mother’s ears. But the rest *belongs* to you.”

「ジョーンズ博士でいらっしゃいますか？」

「そうですが。」

「やっぱり。目がお父様とそっくりでしたから。」

「耳は母親ゆずりです。あとはあなたのものですがね。」

****映画『インディ・ジョーンズ 最後の聖戦』

(53) "I got this from the palace. It's lined with real fur. It could be worth a fortune. If it *belonged* to her."

「これは宮殿で見つけたんだ。裏地は本物の毛皮になってる。きっと凄い価値があるぞ。これが本当に彼女のものだったなら。」

*****映画『アナスタシア』

(54) "This ball *belonged* to your great-great grandfather, Jededian Little."

「このボールは君のひい、ひい、ひいおじいさんのジェデディアン・リトルのものだったんだぞ。」

*****映画『ステュアート・リトル』

(55) "Why would I ask somebody else to kill a horse that *belonged* to me?"

「なぜ、わしが所有している自分の馬を他人に殺してもらうよう頼まなきゃならんのかね？」

*****映画『スパイ・ゲーム』

(56) "We will take China, Hong Kong, Indo-China, Siam, Malaya, Singapore and India! Asia *belongs* to us!"

「我々は中国、香港、インドシナ、シャム、マラヤ、シンガポール、そしてインドを征服するつもりでいる！アジアは我々の手中にあるのだ！」

*****映画『ラストエンペラー』

(57) "You're a blight on this country that never *belonged* to you!"

「あんたはこの国を滅ぼす害虫だ。それにこの国はあんたの手中には収まってないんだ！」

*****映画『遙かなる大地へ』

(58) "There is no arable land that size outside the Reserve. And if there were, we'd not put natives on it."

"Since its theirs..."

"It *belongs* to the Crown, Baroness. What you want is quite impossible."

「保護区域以外でそんな大きさの耕地はないですよ。あったとしても現地の人間をそこに住まわせるわけにはいきません。」

「彼らの土地なのに...」

「英国人の領地なのです、男爵夫人。あなたの要求はとても聞き入れてもらえるものではありません。」

*****映画『愛と哀しみの果て』

3・3・2 保護

(59) "I found him. He *belongs* to me."

「あの宇宙人は僕が見つけたんだ。だから僕が守る。」

*****映画『E.T.』

3・3・3 身柄の確保

- (60) “It seems so wonderful that I’m gonna live with you and *belong* to you. I’ve never really *belonged* to anyone before.”

「あなたの所に置いていただけるなんて本当によかったわ。私は今までずっと一人ぼっちだったから。」

****映画『赤毛のアン』

- (61) “Your ass *belongs* to me. Welcome to Shawshank.”

「君達の身柄は私が預かる。ショーシャンクへようこそ。」

****映画『ショーシャンクの空に』

3・3・4 感化

- (62) “You’re only a boy. You don’t really *belong* to them.”

「君はまだ若い。そして君はやつらの仲間になるような人物じゃない。」

****映画『サウンド・オブ・ミュージック』

3・3・5 附随

- (63) “What’s Montague? It is not hand, nor foot, nor arm, nor face, nor any other part *belonging* to a man.”

「モンタギュー家って何？それは手でもなければ足でもない。腕でも、顔でも、人間の体にあるどんな部分でもない。」

****映画『ロミオ&ジュリエット』

- (64) “Inside of us we both know you *belong* with Victor. You’re part of his work, the thing that keeps him going.”

「俺達二人とも心の中では、君がビクターといるべきだってことは分っているはずなんだ。君は彼の活動に必要な存在であり、彼の原動力なんだ。」

****映画『カサブランカ』

- (65) “Well, I’ve done a lot of it since then. It all adds up to one thing. You’re getting on that plane with Victor, where you *belong*.”

“But Richard, no, I… but…”

“Now you’ve got to listen to me!”

「あれから僕は僕なりに色々と考えたんだ。そして一つの結論に達した。それは、君は、君に最も相応しい男であるビクターと一緒に、あの飛行機に乗って二人で旅立つことだ。」

「でも、リチャード、いやよ。私、そんなこと…。」

「いいから俺の言うことを聞くんだ。」

****映画『カサブランカ』

3・3・6 配偶関係

(66) “Lo and behold you’re someone’s wife. And you *belong* to him.”

「ほら、君は誰かの花嫁になる。そして君は彼の妻となるんだ。」

*****映画『サウンド・オブ・ミュージック』

(67) “You must remember I *belong* to another.”

「この僕は他の女性のものなんだよ。」

*****映画『七年目の浮気』

(68) “I have no reason to stay.”

“You *belong* to me now.”

“I *belong* to no one, least of all you.”

「ここに留まる理由などございません。」

「俺の女だってのにか。」

「私は誰の女でもございません。特にあなたの女になるのなんて、絶対にいやです。」

*****映画『エバー・アフター』

3・3・7 主体と対象物の強い専有関係

(69) “You know, liberals act like idealism *belongs* to them. That’s not true.”

「いいかい、リベラル派は理想主義が自分たち専用のものだと思い込んでいるふしがあるが、それは違う。」

*****映画『ニクソン』

(70) “Uh, John, would you open up! I just wanna know what it feels like to be inside your skin.”

“I don’t want you inside my skin, do you understand? It’s private! What’s in there *belongs* to me!”

「ジョン、心を開いてくれよ。心の奥で考えてる本当のことを話してくれよ。」

「立ち入ってほしくないね。個人的なことなんだ。何だって本心を明かす必要がある？」

*****映画『ハード・ウェイ』

(71) “This heart *belongs* to me. And I know what I believe. But now it longs to be only with you.”

「自分の気持ちに嘘はつけない。自分の信じるものものはっきりしている。君と二人だけでいたい。それだけだ。」

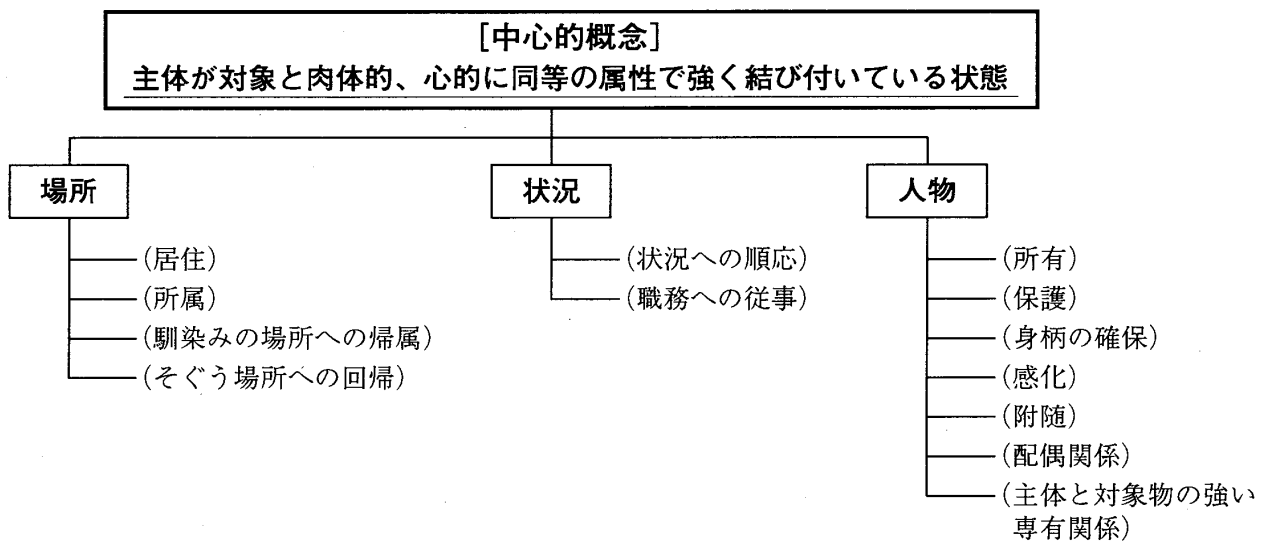
*****AIR SUPPLY, *This Heart Belongs to Me*

4. 分析

4・1 belongの中心的概念と多義構造

以上の採集用例の結果、belongは、「場所」、「状況」、「人物」の三つを対象に取ることを見出した。そして「場所」からは“居住”、“所属”、“馴染みの場所への回帰”、“そぐう場所への回帰”という四つの意味認識が、「状況」からは“状況への順応”、“職務への従事”という二つの意味認識が、「人物」からは“所有”、“保護”、“身柄の確保”、“感化”、“附随”、“配偶関係”、“主体と対象物の強い専有関係”という七つの意味認識が形成されていることが明らかになった。これらの用例全ての根幹に共通するbelongの中心的概念は、おおよそ「主体が対象と肉体的、心的に同等の属性で強く結び付いている状態」と記述出来よう。そこで、こうした中心的概念とそれを基に形成されるbelongの多義構造を図示すれば、図1のようになる。

図1

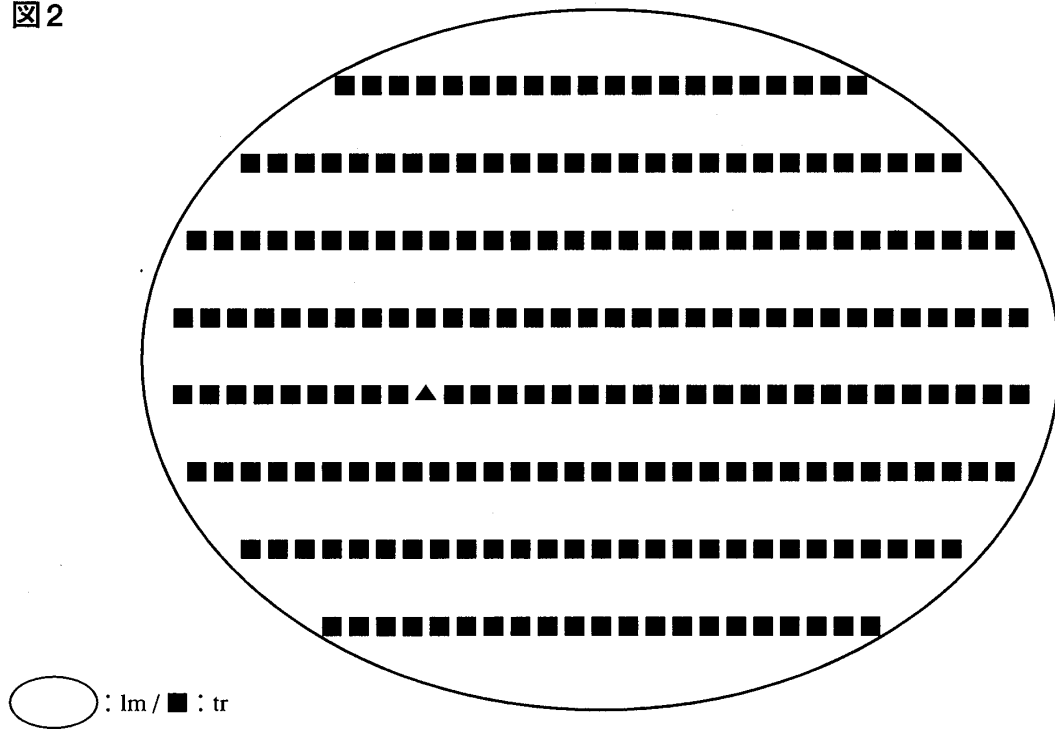


4・2 belongの概念認識図

そして、belongのこうした多義を支える中心的概念の認識部分を図示すれば、図2のようになる。

ここでは、個々の tr (■) が、同じ形で lm (○) の中に並存している様を表している。これは、同一の属性によって結び付いた一つのカテゴリの輪という、belongの概念認識を表している。仮に、ここで個々のtrの中に、一個だけ三角形のものが混じってい

図2



たとしたら、それはこのカテゴリーの輪にそぐわないものであり、それゆえ belong の概念認識から外れる。例えば、個々の tr (■) を金持ちと仮定して、lm (○) が、それらの金持ちが参加している豪華なパーティーと仮定すれば、金持ちとして豪華に着飾り、同等な身なりや言動でその場にいる限り、そこでの成員として違和感を生じない。しかしそのパーティーの中にぼろぼろの汚い服を着て、粗野な態度をあらわにする人物 (▲) が紛れ込んだとしたら、カテゴリーの成員という認識の枠組みから外れることとなり、その者はそのパーティーには帰属度が低く、属さないものとして見なされるだろう。逆に、戦地で着る物も満足になく、食料配給の列に並ぶ難民の列の中で、このような豪華に着飾った金持ちが食料の配給を待つことは、その場の成員として帰属度が低くなる。そしてこれはなにも、金持ちとそれが参加するパーティーといったように、目に見える形での認識だけにとどまらない。この認識は、精神的な帰属意識にも拡張して適用され得る。人間は、動物的感覚と判断で、無意識に相手と自分を様々な観点から比較する生き物である。相手の帰属度や成員の性質が自分と同等である場合、相手との関係に友情や恋愛が芽生える一方で、相手の帰属度や成員の性質が自分より上であると判断した場合には、相手に対して羨望や嫉妬といった感覚を生むことにつながり、逆に相手の帰属度や成員の性質が自分より下であると判断した場合、相手に対する侮蔑や軽視といった感覚を生むことにつながる。

こうした、人間が本来、生得的に備え持っている帰属意識とそこから派生する経験基盤や感覚といった認知機構をイメージ・スキーマ的に捉えた意味の拡張こそが、belong の多義的意味拡張の原理に他ならない。

5. まとめ

belong は、「主体が対象と肉体的、心的に同等の属性で強く結び付いている状態」という中心的概念を基にして、「場所」、「状況」、「人物」の三つを対象に取ることを発見した。これらの三つの対象は中心的概念からのメタファー的転移により意味認識が支えられている。そして「場所」からは“居住”、“所属”、“馴染みの場所への回帰”、“そぐう場所への回帰”の四つの意味認識が、「状況」からは“状況への順応”、“職務への従事”という二つの意味認識が、「人物」からは“所有”、“保護”、“身柄の確保”、“感化”、“附随”、“配偶関係”、“主体と対象物の強い専有関係”という七つの意味認識が形成されることを明らかにした。これらの下部概念の意味認識は、中心的概念からのメタファー的拡張と考えられる。

追記：本論文は、敬愛大学経済文化研究所2006～2007年度個人研究研究助成金（研究課題：「語義の多義的意味拡張とイメージ・スキーマの関連性についての認知論的考察」）による研究成果である。

参考文献

- Austin, J.L. 1961. *Philisophical Papers*. ed. Urmson J.O. and Warnock G.J. Oxford: Clarendon Press.
- Bierwisch, M. 1983. Semantische und konzeptuelle Repräsentation lexikalischer Einheiten. R. Rüzicka and W. Motsch ed. 1983. *Untersuchungen zur Semantik*. pp.61-99. Berlin: Akademie-Verlag.
- Bierwisch, M. and Schreuder, R. 1992. From concepts to lexical items. In *Cognition* 42-1-3, pp.23-60. The Netherlands: Elsevier science publishers.
- Bolinger, D. 1965. The atomization of meaning. In *Language* 41-4, pp.555-573. Baltimore: Waverly Press, Inc.
- Brown, L. 1993. *The New Shorter Oxford English Dictionary*. Oxford: Clarendon Press.
- Brugman, C. 1981. *Story of Over*. M.A. Thesis, Berkeley: The University of California.
- Brugman, C. 1988. *The Story of Over: Polysemy, Semantics, and the Structure of the Lexicon*. New York: Garland Publishing.
- Cruse, D.A. 1986. *Lexical Semantics*. Cambridge, New York: Cambridge University

- Press.
- Cruse, D.A. 1990. Prototype theory and lexical semantics. In Tsohatzidis ed. 1990. *Meanings and Prototypes*. pp.382-402. London: Routledge.
- Dirven, R. et al. 1982. *The Scene of Linguistic Action and its Perspectivization by Speak, Talk, Say, and Tell*. Amsterdam: John Benjamins.
- Geeraerts, D. 1985. Cognitive restrictions on the structure of semantic change. In J. Fisiak ed. 1985. *Historical Semantics*. pp.127-153. Berlin, New York: Mouton Publishers.
- Haiman, J. 1980. Dictionaries and encyclopaedias. In *Lingua* 50-4, pp.329-357. Amsterdam: North-Holland Publishing Company.
- Heine, B. and Claudi, U. and Hünemeyer, F. 1991. *Grammaticalization: A Conceptual Framework*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Jackendoff, R. 1983. *Semantics and Cognition*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Jackendoff, R. 1990. *Semantic Structures*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Jakobson, R. 1936. Beitrag zur allgemeinen Kasuslehre: Gesamtbedeutungen der russischen Kasus. In *Selected Writings ii*, pp.23-71. The Hague: Mouton.
- Johnson, M. 1987. *The Body in the Mind: The Bodily Basis of Meaning, Imagination, and Reason*. Chicago: University of Chicago Press. (菅野盾樹／中村雅之訳. 1991. 『心のなかの身体：想像力へのパラダイム変換』紀伊国屋書店.)
- Kempson, R. 1977. *Semantic Theory*. Cambridge, New York: Cambridge University Press.
- 国広哲弥. 1967. 『構造的意味論』三省堂.
- 国広哲弥. 1970. 『意味の諸相』三省堂.
- 国広哲弥. 1998. 「英語多義語の認知意味論的分析」『神奈川大学創立七〇周年記念論文集』pp.265-284. 神奈川大学創立七〇周年記念論文集編集発行実行委員会.
- Lakoff, G. 1987. *Women, Fire, and Dangerous Things*. Chicago: University of Chicago Press. (池上嘉彦他訳. 1993. 『認知意味論』紀伊国屋書店.)
- Lakoff, G. and Johnson, M. 1980. *Metaphors We Live By*. Chicago: University of Chicago Press. (渡部昇一／楠瀬淳三／下谷和幸訳. 1986. 『レトリックと人生』大修館書店.)
- Langacker, R.W. 1987^a. *Foundations of Cognitive Grammar. vol.1: Theoretical Prerequisites*. Stanford University Press.
- Langacker, R.W. 1987^b. Nouns and Verbs. In *Language* 63. pp.53-94. Baltimore: Waverly Press, Inc.
- Langacker, R. 1988^a. A View of Linguistic Semantics. In Brygida Rudzka-Ostyn ed. 1988. *Topics in Cognitive Linguistics*. pp.49-90. Amsterdam: John Benjamins.
- Langacker, R. 1988^b. A Usage-Based Model. In Brygida Rudzka-Ostyn ed. 1988. *Topics in Cognitive Linguistics*. pp.127-161. Amsterdam: John Benjamins.
- Langacker, R. 1990. *Concept, Image, and Symbol: The Cognitive Basis of Grammar*. Berlin, New York: Mouton de Gruyter.
- Langacker, R. 1995. Raising and Transparency. In *Language* 71-1, pp.1-62. Baltimore: Waverly Press, Inc.

- Leech, G. 1974. *Semantics*. Harmondsworth: Penguin.
- Lehre, A. 1990. Prototype theory and its implications for lexical analysis. In Tsohatzidis ed. 1990. *Meanings and Prototypes*. pp.368-381. London: Routledge.
- Lindner, J. 1983. *A lexico-semantic analysis of English verb particle constructions with out and up*. Bloomington: Indiana University Linguistics Club.
- Lyons, J. 1977. *Semantics vol.1/vol.2*. Cambridge, New York: Cambridge University Press.
- Miller, G. 1978. Semantic relations among words. In Halle, M., Bresnan, B. and Miller, G. eds. 1978. *Linguistic theory and psychological reality*. pp.60-118. Cambridge, Mass: MIT Press.
- 松中完二. 2000^a. 「意味現象の捉え方—先行研究の紹介と整理—」『ICU比較文化』第32号、pp.47-74. 国際基督教大学比較文化研究会.
- 松中完二. 2001^b. 「構造主義言語学における意味研究の黎明」『ICU比較文化』第33号、pp.65-100. 国際基督教大学比較文化研究会.
- 松中完二. 2002^a. 「現代の多義語の構造」飛田良文・佐藤武義共編『現代日本語講座 第4巻 語彙』pp.129-151. 明治書院.
- 松中完二. 2002^b. 「認知言語学における意味研究の黎明」『ICU比較文化』第34号、pp.123-155. 国際基督教大学比較文化研究会.
- 松中完二. 2003. 『現代英語語彙の多義構造—認知論的視点から—』国際基督教大学大学院比較文化研究科提出博士学位論文.
- 松中完二. 2005. 『現代英語語彙の多義構造—認知論的視点から—【理論編】』白桃書房.
- 松中完二. 2006. 『現代英語語彙の多義構造—認知論的視点から—【実証編】』白桃書房.
- Miller, G. 1978. Semantic relations among words. In Halle, M., Bresnan, B. and Miller, G. eds. 1978. *Linguistic theory and psychological reality*. pp.60-118. Cambridge, Mass: MIT Press.
- 初山洋介. 1997. 「慣用句の体系的分類—隠喩・換喩・提喩に基づく慣用的意味の成立を中心に—」『名古屋大学国語国文学』第80号、pp.29-43. 名古屋大学国語国文学会.
- 初山洋介. 2001. 「多義語の複数の意味を統括するモデルと比喩」山梨正明編. 2001. 『認知言語学論考』No.1、pp.29-58. ひつじ書房.
- Norving, P. and Lakoff, G. 1987. Taking: A Study in Lexical Network Theory. In *BLS 13*. pp.195-206. Berkeley: Berkeley Linguistic Society, Inc.
- Palermo, D. 1982. Theoretical issues in semantic development. In Kuczaj, S. ed. 1982. *Language development 1: syntax and semantics*. pp.335-364. Hillsdale, NJ: Lawrence Earlbaum Associates.
- Rosche, E. 1973. On the internal structure of perceptual and semantic categories. In Moore, T. ed. 1973. *Cognitive development and the acquisition of language*. pp.111-144. New York: Academic Press.
- Ruhl, C. 1989. *On Monosemy: A Study in Linguistic Semantics*. Albany: State University of New York Press.
- Sampson, G. 1980. *Making Sense*. London, New York: Oxford University Press.
- Searle, J. 1983. *Intentionality: An Essay in the Philosophy of Mind*. Cambridge, New

- York: Cambridge University Press.
- 瀬戸賢一. 1997. 「拡大するメトニミー——認知言語学の問題点——」 *PROCEEDINGS OF THE TWENTY-FIRST ANNUAL MEETING*. pp.67-77. 関西言語学会.
- 小学館ランダムハウス英和大辞典 第2版編集委員会編. 1994. 『ランダムハウス英和大辞典 第2版』 小学館.
- 田中茂範. 1987. 『基本動詞の意味論 コアとプロトタイプ』 三友社.
- 田中茂範. 1990. 『認知意味論 英語動詞の多義の構造』 三友社.
- Taylor, J. 1989¹ (1995²). *Linguistic Categorization 2nd ed.* London, New York: Oxford University Press. (辻 幸夫訳. 1996. 『認知言語学のための14章』 紀伊国屋書店.)
- Ullmann, S. 1951^a. *Words and their Use*. London: Muller.
- Ullmann, S. 1951^b. *The principles of Semantics*. Glasgow: Jackson.
- Ullmann, S. 1962. *Semantics: An Introduction to the Science of Meaning*. Oxford: Basil Blackwell & Mott Ltd.
- Wunderlich, D. 1991. How do prepositional phrases fit into compositional syntax and semantics? In *Linguistics 29-4*, pp.591-621. Berlin, New York: Mouton de Gruyter.
- 山梨正明. 1995. 『認知文法論』 ひつじ書房.
- 山梨正明. 2000. 『認知言語学原理』 くろしお出版.
- Zipf, G.K. 1949. *Human behavior and the principle of least effort*. Cambridge: Addison-Wesley.